

∞ 移り行く絆のように
∞

アクア=イスタロス

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

少年少女たちは戦う。

己の道を護るため。

己の願いを叶えるため。

己の過去を見出すため。

故に、少年少女たちは数多の壁に阻まれるだろう。

見知らぬ強敵に。

見知った戦友に。

そして、訪れる。

必ず選ばなければならない、究極の二択。

誰と共に歩むか。

全ての未来は、過去の選択から紡がれてゆく。

その手に取りし絆が、最後の最後に花開く事を。

ただひたすらに願ひ、祈る。

そこに至るまでに、朽ち行く数多の骸の上を歩きながら。

だが、歩みを止める事はない。

彼らは——選ばれたのだから。

初めての方も、お久しぶりの方も、まずはこの物語を見に来て頂き、感謝を。

久しぶりにこのような投稿サイトにて筆を手に取り（キーボードを叩き？）ました。

至らぬ点も数多くあるかとは思いますが、皆さまの暇つぶしになれば幸いです。

それでは、『SS移り行く絆のようにSS』をご覧ください。

目次

序章 始まりの賛歌

第0話 epilogue top

rollogue | 1

第1話 in momentary

peace | 8

第2話 first landing

Naberius | 17

第3話 the assault

arker | 30

第4話 calamity Na

berius | 44

第5話 the ice world

第6話 | 56
the frozen or

68

序章 始まりの賛歌

第0話 epilogue to prologue

とある宇宙のとある銀河のとある場所。

そんな場所で生まれ、散り、また生まれた。

生命の誕生と滅亡を繰り返し、彼らは確かな足場を築きあげた。

この、広大な宇宙の彼方で……。

— epilogue to prologue —

四十年前。

いくつかの惑星を拠点として活動する銀河最大規模の惑星間旅行船団『オラクル』に
対し、突如、攻撃を仕掛けた宇宙最大の悪と呼ばれた宇宙生命体——^{エルダー}ダーク・ファルス
【巨軀】——との戦争は、三人の英雄によって終結した。

しかし、彼の者との戦争によって生まれた傷跡は深く、多大な犠牲者——特にオラクルの職務を実際に行う調査兼戦闘員の数が激減した。

——このままでは『オラクル』が成り立たない。

組織存続を危惧した三英雄が一角、『レギアス』は実働部隊『アークス』の人材確保と質向上を願い、一つの学校を創立した。

それが此処、『アークス養成学校』の成り立ちである。

今日はこの学校の卒業式であり——全ての物語が動き出す全てにして原点の日である。

『——それでは！これより、第三十九回アークス養成学校の卒業式を开会致します!!』

それまでざわめいていた会場がピタッと静まる。

大人も子供も、この会場に居る全ての者たちが。

例年であれば、卒業生たちの晴れ舞台とはいえ、『涙ではなく笑顔で送り出そう』という学校長のコンセプトの下、学校全体が賑やかな雰囲気での卒業式を進行していく。

ただし、今年は訳が違った。

『卒業証書授与。名前を呼ばれた者は卒業生を代表して、証書を受け取ってください』

アークス養成学校の一学年は数が多い。

無論、年によってばらつきはあるものの、少なくとも入学者が千を下回る事はない。

その全員が無事に卒業できる訳ではないが、それでも毎年数百人はこの養成学校から羽ばたいていく。

しかし、何故こうも入学者の列が後を絶たないのか。

その理由は、この学校の成り立ちとアークスの入団試験にある。

まず、前者の理由だが、アークスを目指す者たちにとって、この養成学校が絶好のアピール場所であるのは言うまでもない。

学生の中に優秀な成績を納める事が出来れば、それは己の自信にもなり、アークスへ入団した際の箔にもなる。

そして、後者の理由だが……こちらこそ、言うまでもない。

実働部隊であるアークスの戦闘員に求められるのはどんな環境においても生き残るしぶとさと力だ。

現に、彼らは様々な惑星に降り立ち、環境調査や原生住民との対話、時に戦闘を行う。向き不向きはあるにしても、最低限の戦闘をこなせる必要がある。

それらを見極めるには試験が厳しくなるのは必然な訳で。

戦力増強が奨励されていた過去と比べ、現在では年数回行われる試験で合格する人数

はほんの一握りである。

その一握りに選ばれたと思う者たちが、戦い方を学ぶべく挙つて養成学校の門をたたきに來るのも必然と言う訳だ。

話が逸れてしまった。

つまり、このアークス養成学校の卒業生は多い。

そんな彼ら全員に証書を手渡していくには膨大な時間がかかるし、暇もない。

そのため、卒業式では学生の間には本当の意味で成績優秀者数名のみに対し証書を手渡す。

その数によって、この年の学生たちの質が見極められているのは言うまでもない。

『首席、アラン＝クリアフオード！』

「はいっ！」

最初に呼ばれたのは白髪の小柄な少年。

元氣よく返事をした後、中央の壇上に立つ学校長より証書を受け取る。

『次席、リユラン＝アルタメシア！』

「はい」

次に呼ばれたのは背の高い、銀髪の男。

少しばかり氣だるそうに返事をし、同じように証書を受け取った。

『三席、リオン⇨カーミラ』

「はいー！」

『おお…』

次に呼ばれた女性を見て、会場にどよめきが湧く。

理由は簡単、彼女の容姿が優れていたからだだろう。

アイドルに引かず劣らずと言える。

また、髪が黒だったのも原因の一つだろう。

見渡す限り、多種多様の髪色が見て取れるが、唯一黒は彼女を除いていない。

勿論、理由はあるのだが…ここでは口を閉じよう。

『四席、アフィン⇨サザーラン』

「はいはいー！」

ため息も吐かんばかりの空気が一瞬にして崩壊した。

そんな軽い返事を返した少年に対し、会場に居る全員が冷ややかな視線を寄こすのは

仕方がないだろう。

最も、件の少年は気にした様子を見せなかったが。

『——それでは、最後に学校長のお言葉です。お願いします』

成績優秀者の証書授与が終わり、送辞、答辞が厳かに終わった。

この卒業式もいよいよ次が最後だ。

司会の言葉と同時に現れたのは全身白に鋭い目つきを持った人物。

この学校の創立者であり、三英雄に名を連ねる偉大な人物。

『卒業生の諸君。卒業おめでとう。とりあえず、長い話は諸君も嫌いだらう。私も嫌いだ。なので、手短に纏めよう』

英雄、レギアス。

偉大な功績を誇る彼は、茶目つ気たつぷりに締めめの挨拶を始めたのであった。

『この学校を卒業する諸君らの実力は、入学当初と比べ遥かに向上しただらう。同時に、共に学び、時に協力し、様々な時間を共に過ごした仲間とも出会い、絆を深めたと私は思う。これから君たちは多くの困難に立ち向かうだらう。そんな時、君たちは諦めるのではなく、挫けず、必死に足掻いて前に進んでほしい。一人では無理かもしれない事も、仲間と共に立ち向かえば乗り越えて行けるということを、忘れないでほしい。この言葉を、卒業する諸君への手向けとし、これを以て卒業式を終了とする』

英雄から贈られる言葉。

それは、多くの者に届き、様々な感情を抱かせた。

感動、期待、希望、闘志、同意等など、様々だ。

式が終わり、卒業席が席を離れ、学校を離れ行く。

期待と希望を胸に、新たな旅立ちを迎えるために。

同時に、ここから全ての物語は始まったのだろう。

アランⅡクリアフォード、リユランⅡアルタメシア、リオーンカーミラ、アフィンⅡ
サザーラン。

この四人を中心に、全ての歯車が動き出した。

飽くなき数十年に及ぶ全ての事象に決着がつく——一年の始まりであった。

s t o b e c o n t i n u e s

第1話 in momentary peace

アークスになるべく試験に臨む少年少女たち。

しかし、そこへ忍び寄る何者かの足音。

誰かを求める声と探す声。

安全な地は何処へ……。

— in momentary peace —

『『オラクル』——それは、惑星間を自由に旅する巨大な船団だ』

男性の声を模した機械音声が頭上より響く。

『その誕生と共に、外宇宙への進出が可能となり、新たな歴史は始まった』

音声が発する内容は僕が住む巨大な船団——通称『オラクル』の誕生とその歴史を簡潔に纏めたものだ。

『そして今や、我々の活動範囲は数多の銀河に渡る』

今まで何も知らずに生きていたのであればともかく、養成学校で学び、卒業した身としては繰り返し延々と聞かされてきた内容だ。

『行く先々で見つかった、未知の惑星には『オラクル』内で構成された部隊……『アークス』が惑星に降下し、調査を行う』

ただ、僕がいる場所は僕のような養成学校卒業生ばかりがいる場所じゃない。

養成学校には入らず、独力で己を磨きあげ、今日に臨んでいる人もいる。

『『アークス』は『オラクル』に存在する三種族からなる』

養成学校では当たり前でも、外部から挑む人からすれば当たり前ではないかもしれない。

だからこそ、このタイミングでこれから所属するかもしれない部隊の歴史や構成を覚えておこうと誰かが考えたのだろう。

『バランスに長けたヒューマン。フォトンの扱いに長けたニューマン。屈強な身体を持つキャスト』

ただ、僕はこう考える。

それすらも知らない人がこの試験に合格することはない。

歴史や構成などの知識を知っている者だけがここにいと見越した上での内容が出

てくるのだろう、と。

『それぞれが補い合い、協力する事で、我々『アークス』が成り立っているのだ』
まあ、そんなことを考えたところで、試験の内容は例年と変わらないのだろう。

『——到着したようだな。これより向かう惑星はナベリウス』

だから僕は映像——朗読していたのはレギアス様——から目を放し、『オラクル』から惑星へ向かう際に使用する『キャンプシップ』の窓から外の景色を見つめる。

青と緑が映える惑星——ナベリウス。

僕たちの運命を決める、決戦の惑星。

『文明は存在せず、原生生物は凶暴だ。決して油断はするな。——健闘を祈る』

『アークス』の頂点に立つ御方から「健闘を祈る」だなんて……個人に向けての言葉ではないにしても、少し嬉しい。

『新たに誕生する『アークス』よ。今から諸君は、広大な宇宙へと第一歩を踏み出す。覚悟を決め、各々がパーソナルデータを入力せよ』

そうだ。

僕は『アークス』へ入る。

レギアス様とマリア様に育てて頂いた恩を返すために。

それが僕——『アラン・クリアフォード』の道だ。

『我々は、諸君を歓迎する』

「はあー、ようやく終わったか。肩の凝るアリガタイお言葉だこと」

僕の目の前で大きく背伸びをし、肩を回す少年の姿が見える。

見知った姿に緊張で強張っていた身体が少しだけ落ち着いた気がした。

「そんなこと言わないでよ、アフィン。レギアス様は僕たちを心配して言ってるんだし」
『アフィン＝サザーラン』

養成学校の同期で、主にライフルを扱うレンジャークラスの友達だ。

お調子者と言われる事が多いけど、空気を読むことに長けている……気がする。

見た目や口調とは裏腹に、実力はとても高い。

「分かってるさ。けどよ、俺たちも、俺たち以外も、覚悟した上で来てる。——死ぬかも

しれない世界に、飛びこむってことをさ」

「……」

「それはお前だつてそうだろ、アラン」

「…もちろんだよ」

僕の言葉に、アフィンがニツつと笑う。

その笑みにつられて僕も笑う。

「楽しそうだね、二人とも」

「なんだ、お前もこのシツプから出発なのかよ。リオン」

どこからか聞こえてきた声。

その姿を探すために後ろを振り向くと、キャンプシツプの転送装置から現れた少女の姿。

彼女もまた見知った人物だ。

「なんだとは酷い言われようですね。私が居たら嫌？」

『リオン⇨カーミラ』

彼女も養成学校の同期で、第三世代と呼ばれる複数のクラスを扱う事が出来る一人だ。

彼女は特にフォースやテクターと言った魔法系クラスを好む——と聞いた。

情報源は彼女とよくいるとある人物から。

実力は見かけ同様、優秀の一言。

「べつつにー」

「拗ねた格好しても誰も慰めないですよ？」

「う、煩いなー…」

「二人とも、仲いいね」

「良くない！」

「ただ同期の腐れ縁なだけです、アラン」

「このやり取りも養成学校ではよくあつた光景だ。

本当ならもう一人いるんだけど……流石に養成学校でトップを誇った四人が全員同じキャンパスじゃやないだろうし、ね。

——あ、このやり取りってリオンが良く言うフラグ？ってやつだったつけ——

「相変わらずだな、そのやり取り」

「あ、リユランもこのシップなんだね？」

「ああ」

やはり、リオンの言うとおりに、フラグの力は絶大らしい。

僕が心の中で彼の事を考えたから当然のように彼が現れたみたいだ。

『リユランIIアルタメシア』

彼もアフィンやリオンと同じ養成学校の同期で、第三世代の一人だ。

大抵の人は近距離か遠距離か絞って取り組んでいたにも関わらず、彼は刀や弓を扱うブレイバーとツインマシンガンを扱うガンナーという遠近両道を行く人物だ。

彼の實力もまた、成績通りとだけ。

また、彼も僕と同じように色々と事情を抱えている身なただけ……ここで話す事は止めておこう。

「にしても、俺にアランにリユラン……と、リオンの四人を同じシッブに配属するだなんて……何考えてんだ？普通はバラバラに配置するもんじゃないのか？」

「はあ……少しは考えたらどうですか？」

「た、ため息つくんじゃねえ！か、考えるから言うんじゃねえぞ!!」

「…必死ですな」

「…うん」

「のんびりしている暇はないぞ。そろそろ始まる」

流れていた映像から聞こえるカウントダウンの音。

結構話していたみたいだ。

「そうみたいです。それでは、私の組はもつと後ろなのでまた後で。リユラン、行く？」

「ん。また後でな、アラン」

「頑張ろうね〜」

因みに、順番は最初がアフィンで次が僕。

数組飛ばしてリオンの組が行き、最後にリユランダ。

あ、注目の試験内容だけど、この惑星の『森林地域の奥地調査』だ。

最深部まで行き、試験官が設置した証を手に入れたら終了って内容だ。

近年の人材不足のためか、ある程度戦えるのであれば問題ないらしい。

レギアス様も頭を悩ましているのだろう。

「——ああああつ!?分からん、分からん!?!」

「……まだ考えてたんだ」

「アフィンエ、さっさと行くぜエ」

「わっ、お、おい!俺はまだ考え中——」

未だにさっきの意味について考えていたアフィンが同じ組の人に引き摺られる形で消えていった。

…大丈夫だろうか?

彼にばかり心配してはられないけど。

次は僕だしね。

「準備はいいかい？」

「もちろんさ。行こう！」

目的は勿論、『アークス』の一員になること。

恩を返すために、僕の歩みはここから――

S t o b e c o n t i n u e s

第2話 first landing Naberius

S

自然豊かな緑の惑星。

歩む者へ近づくと不穏な足音。

果たして、彼らは狙う者か、狙われる者か。

決して、歩みを止めるべからずや。

— first landing Naberius —

「——つと。……此処が、ナベリウスか」

キャンプシップから降り立った僕たちの目の前に現れたのは柔らかい地面と濃い新緑。

どこからともなく聞こえてくる鳥の鳴き声が少しだけ今が試験だという事を忘れさ

せた。

「結構長閑な場所だな。どこを向いても緑ばかりだ」

「本当だね。まあ、のんびりしてる暇はないんだけど」

そう、僕は此処へ遊びに来た訳じゃない。

大切な人たちの隣に並ぶためにも、この試験でつまづく訳にはいかない。

必ず、試験に合格するんだ！

『それでは、第二組の二名。スタートしてください』

「よしっ、行こう！」

「ああ。頼りにしてるぜ、アラン」

「援護は任せたよ、ラジュア！」

僕の相方はラジュアIIボーン。

養成学校の同期で、クラスはレンジャーだ。

数いる受験生の中で養成学校の知り合いが相方なのは強みだろう。

「さて、最初の話では原生物がいるって聞いたけど……」

「ああ。流石に姿や特徴は教えてもらえなかったがな」

僕はファイターの武器である『ダブルセイバー』を、ラジュアはレンジャーの武器で

ある『ランチャー』を構えながら道なりを進む。

道中、木や草むらの影に注意しながら進むが、一度も敵に遭遇する事無く最初の分岐点が現れる。

「何だか拍子抜けだな」

「まあ、演習みたいに決まったタイミングで出てくる訳じゃないからね」

「だがよ。ここまで全く出てこないと試験にもならねえぜ」

「でも、気を抜いたらダメだよ」

「わーつてるよ」

全く敵が出てこないため、相方のラジュアはもう終わった気でいそいだ。

それを注意する僕も、心の中では少しだけ浮かれていた。

だからだろうか。

僕は、後ろから迫っていた敵に気がつかなかった。

「——ッ!? くっ」

「うおっ!?!」

——やられた!

背中に良いのを貰ってしまった。

傷ついた背中から熱い液体が流れ落ちる感触が伝わる。

…でも、致命傷には程遠い。

それだけが幸いか。

初の実戦だというのに、どこか冷静に状況を分析し、襲いかかった何かから距離を取るために転がる。

同時に、襲撃者の姿をこの目に捉える。

鋭い爪と黄色の体毛…。

あれがこの惑星の原生獣か…！

「くそっ！おらあッ!!」

ラジュアがランチャーを発射し、敵に直撃する。

ランチャーの特徴は着弾した場所から爆風が広がり、周囲にもダメージを与えるというもの。

つまり、敵に直撃せずとも周辺にさえ当たれば敵の目をくらます事も可能なんだ。

そうやって彼が時間を稼いでいる間に体勢を立て直す。

同時に、ポーチから回復アイテム『モノメイト』で口に含み、飲み込む。

すると、背中から感じていた痛みや熱が消え、身体が軽くなった気がした。

よし、いける！

「ラジュア、お待たせ！」

「おっしや！デカイのぶち込むぜエ!! 『デイバインランチャー』!!」

ランチャー系フォトンアーツ『デバインランチャー』
ラジュアの持つランチャーから勢いよく弾が発射され、用心深くこちらを睨んでいた
原生獣に直撃した！

あの弾の特徴は当たった敵を真上に吹き飛ばす事。
空中で身動きが取れない間に距離を詰める！

「……ハアツ!!」

敵が地面に落ちたのと同時に、手に持つダブルセイバーを投げつける！

ダブルセイバー系フォトンアーツ『デッドリーアーチャー』

臂力を振り絞って手の両剣をブーメランのように投げつける技だ。

この技の特徴は投げつけた両剣が回転しながら連続で敵を斬りつける事だ。

『グギャギャ?!』

投げつけたダブルセイバーが原生獣に直撃する。

一回、二回、三回と回転しながら原生獣を切り刻む。

回数が八回を数えたところで、両剣が回転しながら戻ってくる。

しっかりと掴み、原生獣の攻撃に備え再び構える。

『グ……ギユ……』

しかし、先程の攻撃が致命傷だったようで、原生獣は力尽きて倒れた。

……動かない、な。

「はあ、はあ、はあ……」

緊張から解放されたと同時に膝が落ちる。

「どうやら、自分が思っている以上に敵に襲われたという事実は心身を傷つけていたよ
うだ。」

「大丈夫かアラン!？」

「……大丈夫。体力は回復したし、傷も塞がってるし」

実際に、背中に受けた傷はもう跡すら見えない。

服が破れているからこそ攻撃された場所は丸わかりだが、特別困る事はない。

「だけど、今は何よりも休みたいかな。」

「そ、そうか。……済まない」

「何で、ラジュアが謝るの?」

「……俺が、気を抜くような発言ばかりかしてたから……」

「それなら、僕だって同じさ。しっかりと周りを警戒してれば問題なかった。ラジュア
ばかりの責任じゃない」

「けど……いや、これからは気をつける。試験終了まで頼むぜ」

「もちろん。生きるために、頑張ろう」

先程の経験から、身体を休める前に辺りを見渡す。

木や草の影だけではなく頭上に木の枝がないかどうか。

先程の原生獣は最初の奇襲後、身軽にジャンプしながら近づいてきた。

もしかしたら、木の枝を伝って近づいてきたかもしれないからだ。

「特別動く気配はなさそうだな」

「うん。少し休もうか」

「ああ。……身体は、痛むか？」

「さつきも言ったけど平気だよ」

「……………」

「…………ごめん。少しだけ」

「お前の泣き言が聞けてよかったよ。辛そうにしてんのに何も言ってくれねえからな、信頼されてねんじゃねえかと思ってたんだよ」

「う…、ごめん。あんまり心配掛けたくなかったんだよ」

「分かってるさ。……優等生としてのプレッシャーもあるだろうしな」

——だが、実戦には関係ねえぞ。

背中です語ったラジュアの想いに、僕はスツと身体が軽くなった気がした。

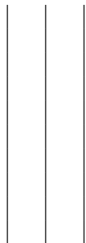
…僕は、背負い過ぎていたのかな…？

「オイ、そろそろ進むぞ」

「——うん！」

身体を起こし、先に進むラジュアの下へと急ぐ。

今の僕に、プレッシャーなんてなかった。



休憩から数分。

たった数分ではあるが、既に五体もの原生獣と遭遇し、いずれも討伐することができた。

ただ、最初の頃とは打って変わってかなりの確率で遭遇しているから、この先を思うと少しだけため息が零れてしまう。

「げっ…」

「また、だね」

噂をすれば影、とはこのことか。

目の前の木の枝から落ちて——いや、降りてきたのは一番最初に遭遇した黄色の原生獣。

ただ、未だこちらに気が付いていないようで、香気に草陰をゴソゴソと漁っている。

これは…先制のチャンスだ。

「アラン。俺がデカイのをぶつ放す。追撃は任せませ」

「任せてよ」

ガコン、とラジュアがランチャーから通常弾を取り外す。

そして、新たに別の弾を取り出す。

その弾を詰め、すぐさま敵へと突進する。

「——ッ、オラッ!!」

ランチャー系フォトンアーツ『ゼロデイスタンス』

ギリギリまで敵との距離を詰め、零距离射撃を行う。

リスクとリターンの狭間を攻める攻撃だ。

『ギャウ!?!』

零距离からの砲撃に、原生獣は吹き飛ばす。

追撃のため、すぐさま距離を詰める。

決め技は考えてある。

ダブルセイバー系フオートンアーツ——

『サプライズダック』ツ!!』

原生獣の真上へと跳び、身体を弓のようにならせ、両剣を頭上に構える。

原生獣が崩れ落ちたままの体勢でこちらを見つめる。

瞳に映るのは、殺意か恐怖か——

「オオオオオオオオッ」

普段なら哀れに思うのかもしれない。

だけど、今の僕にはそんな余裕はなかった。

殺るか殺られるか…。

ここで殺らなければ——他の誰かが殺られるかもしれない。

僕には、その事実こそが耐え難い。

「ぜやあつ」

ドドオン、という衝撃音と共に僕を中心に衝撃波が広がる。

衝撃の反発を受け、吹き飛ばされるも空中で体勢を立て直し、着地する。

『グ、グオオ…』

まだ、生きているか。

さらに追撃したいところだが、僕は着地に成功したとはいえ、技の発動に伴う硬直によつて動けない。

だけど、僕は一人じゃない。

「ラストは任せろ!!」

既に、ラジュアが追撃のために近づいていた。

そして、先程と同様に零距离まで近づき——

「!?うおっ」

吹き飛ばされた。

——つえ？

「ラジュア!!」

「俺は大丈夫だ!くそつ、何なんだよ!」

「一体、何が——」

吹き飛ばされたラジュアの様子を見て、無事だと分かり一安心。

しかし、原生獣の方を見て愕然とした。

何故なら…何故なら——

「アレは、何?」

『グオオオオオオッ』

さつきまで瀕死だった筈の原生獣が力強く立ち上がり、咆哮する。

さらに、体毛が黄色からオレンジ混じりの色へと変わる。

そして、何よりも違うのは――

「アイツの背中に、あんなの生えてなかったよな……!？」

原生獣の背中から突然現れた、奇妙な球体と受け皿を組み合わせたような不気味な物体。

自然には出来るはずもない人工的な物体の出現に、僕らはただ困惑するばかり。だけど、いつまでも迷っていられる訳ではなく。

『ウーウーウー』

「!警報?!」

「そんな、こんな時に!？」

耳元に装着している無線から緊急事態にのみ鳴る警告音が鳴り響く。

普段なら――いや、実戦の最中においてはこの言葉に意味はないかもしれないけど、目の前に豹変した原生獣がいる今は特に起きて欲しくなかった!

『管制よりアークス各員に緊急連絡!惑星ナベリウスにてコードD発令!フォトン係数が危険域に達しています!――繰り返します。惑星ナベリウスにてコードDが発令!』

∞
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
∞

空間侵食を観測、出現します！』

第3話 the assault Darker

現れるは漆黒の闇。

埋め尽くすは盜賊の鎌。

奴らに背中を見せてはならない。

奪われるのは命だけとは限らない。

— the assault Darker —

『管制よりアークス各員に緊急連絡！惑星ナベリウスにてコードD発令！フォトン係数が危険域に達しています！——繰り返しします。惑星ナベリウスにてコードDが発令！』

空間侵食を観測、出現します！』

『ギギイ……ギギイ……』

「おい、こいつらつて……まさか！」

「禍々しいフォトン…間違いない。あの原生獣の変化もこいつらの影響だろうね」
冷静に聞こえるかもしれないけど、頭の中ではパニックになってる。

この惑星における出現確率が零だという実績があるからこそ、この試験の会場として選ばれていると聞いたんだけど…どうやら、嘘みたいだ。

——いや、呑気にそんなこと考えてる場合じゃない！

「ラジュア、来るよ！」

「分かってる!!」

『カチャカチャ、カチャカチャ』

僕らの周囲を取り囲むように現れた黒い物体。

四本の足と球体のと頭と胴体。

鋭い目尻に何を見ているのか分からない赤の眼。

これが——ダーカー。

『ダーカー出現を確認。空間許容限界を超えています！全アークスへ通達！最優先命令コードによるダーカーへの戒厳令が下されました！』

「これでも喰らいやがれッ」

「はあッ！」

僕は目の前の原生獣を、ラジュアは後ろのダーカーを。

それぞれ、渾身の力で攻める。

後ろから大きな衝撃音が響く。

僕も目の前の原生獣を倒し——きれない!?

「くっ、もう一度——あぶなっ!？」

先程まで攻撃していたからこそ、すぐに倒れると油断してしまった。

攻撃を受けてふらふらしていたと思ったのだけれど、今の自分の攻撃に対して避けるどころか受け止めてみせたのだ。

間違いなく、背中から現れた奇妙な物体の影響だろう。

しかも、すぐさま反撃のつもりか、爪を振りまわしてきた!

まさか、ここまで変わるなんて…ッ!

「アラン!大丈夫か!？」

「ごめん!後ろは任せた!!」

「おう!やってやるぜ!!」

本来なら、前衛職の僕が相手しなければならぬ。

けど、目の前の敵は今の僕では倒すのに時間がかかる。

それに、目の前の敵の左右や後方には複数のダーカーがいる。

……まずは目の前の敵を倒す。

『ケイオスライザー』!!——続いて、『サプライズダンク』!!」

ダブルセイバー系フォトナーツ 『ケイオスライザー』

得物を高速回転させることで周囲の敵を引き寄せ、攻撃する技だ。

ただ、この技の強みは攻撃じゃない。

引き寄せ、敵を打ち上げる事こそ、この技を選んだ理由だ。

特に、こんな乱戦の時に少しでも敵の行動を中断できるのは大きい。

——なのに。

「まだ倒れないのか…ッ!」

周囲のダーカーが倒れてもなお、目の前の原生獣は力強く二本足で大地を踏みしめていた。

今まで倒した同じ種類の原生獣であれば既に三回は倒れているだろう。

それでも倒せないのは、あの奇妙な物体の影響か、それとも他に理由があるのか…。

でも、これで一対一。

一対一なら負けるはずがない!

「はああああっ!」

熾烈に、苛烈に、鮮烈に攻め続ける!

相手がしぶといだなんて関係ない。

反撃を許す暇を与える事無く、封殺するッ！

そして、その時はきた。

『ギユウ…ガアアア……』

どれだけの時間と手数を掛けただろう。

どれだけの苦痛を覚えただろう。

それでも、僕は、今、この大地に立ち続けている。

たった一体の敵を倒しただけに過ぎない。

これまでの過程で倒した敵の。

ここから先倒していくであろう敵の。

数万、数億になるかもしれない数の一体。

でも、僕はこの日、この時を忘れることはないだろう。

それだけ、この原生獣は僕の中に刻み込まれた。

「——つて、ラジュアの援護をしないと！」

「マジで頼む!!」

「任せろ！伏せて!!」

ダブルセイバー系フォトンアーツ『トルネードダンス』

身体を振り、回転させながら突進する。

ただ、そのまま行くとラジュアにぶつかってしまうのは眼に見えているので、少しだけジャンプしてから行う。

瞬間的な移動と攻撃の両方を同時に行う事ができる、ダブルセイバー系で唯一のフォトンアーツだ。

ただ、この攻撃を行う時に毎回頭を過ぎる言葉がある。

『…あり得ない…。運動量ゼロの状態から任意の方向へベクトルを与えらるか……。物理法則を完全に無視して…。』

リオンが初めてこの動きを見たときに呟いていた言葉だ。

何気なく聞いていた上、ほとんど言葉の意味は分からなかったのだけれど。

「はあッ！」

初撃が戦闘にいたダーカーに衝突する。

かなりダメージを受けていたのか、一撃受けただけで力無く崩れ落ちる。

続けて、後ろにいた複数のダーカーを巻き込みながら攻め続ける。

ただし、攻撃が直線である以上、取りこぼしもいる訳だ。

——だからこそ、この技が活きるのだけれども。

「——ッ、『ケイオスライザー』!!」

技の途中で強引に身体を止める。

そして、続けざまに先程も使ったフォトンアーツ『ケイオスライザー』を行う。

身体が軋む音が鳴った気がするが、この程度でくたばるような鍛え方はしてない！

「あああああつー！」

「アラン！半歩下がれ!!『クレイジースマッシュ』!!」

「ぐおっ!?!」

ランチャー系フォトンアーツ『クレイジースマッシュ』

後衛職とは思えぬ打撃攻撃。

だが、ランチャーという重量のある武器で行うからこそ、見た目の派手さと威力がある技だ。

——まあ、こんなのんびりと解説できるのも僕が技の余波を受けて吹き飛んでいるからなんだけれど。

「ア、アラン!?!」

「げふっ!?!」

地面に叩きつけられた。

結構痛い…。

「す、すまねえ！大丈夫か!?!」

「だ、大丈夫…。直撃してないから……」

「お、おう…。まあ、安心して痛みが引くのを待つていいぜ。今の一撃で残った奴らは全部消し飛んだからな」

「う、うん…」

いくらくたばるような鍛え方をしないで言っても、酷使すればやっぱり痛い訳で。

特に、最後の強引な連続技——レギアス様やマリア様はこれをキャンセルと呼んでいた——は、あまり使いたくない。

フォトンアーツの連続使用もそうだけど、身体に無理やり別の動きを行わせるのだから。

成長中の僕の身体に負担をかけないように、とマリア様から許可を頂いた一日にやつてもいい回数は二回まで。

この先、今みたいな激闘がなければいいのだけれど。

「とりあえず、目の前の危機は去ったみたいだな」

「そう、だね…。つう…ッ」

「お、おいおい。まだ動くなつて！あんだだけの連戦に加えて無理な動きが負担を掛けているだからよ」

「ううん。あんまり休んでばかりもいられないよ。付近にダーカーとかの気配がないとはいえ、警戒態勢が解除されたわけじゃないしね」

「…さつきも言ったが、無理だけはすんなよ。俺たちはパーティなんだ。頼ってくれ」
「もちろんだよ、ラジュア」

この課題に対し、一人で挑むのは無謀なのだと思い知らされた。

大切なのは個の力より仲間を信頼し、協力するチームワーク。

……無謀と勇敢は別のものって誰かが言ってたっけ。

『——たすけて』

「——？ラジュア、何か言った？」

「いや、何も言っていないが…？」

一瞬、助けを求める声が聞こえた気がするけど…気のせい？

『——たすけて』

「……」

「おいおい、さつきの戦闘で頭をぶつけたんじゃないか？もうちよい休んでも——つて、何処行くんだよ!?!そっちは指定された方角じゃないぜ!?!」

「気のせいじゃない。誰かが助けを求めている。こっちだ!?!」

「お、おい!?!——ああ、くそ!待てよ、アラン!!俺にも納得のいく説明をしろ!!」

ラジュアが説明を求める声が聞こえたけど、今はそれどころじゃない。

僕にしか聞こえない声など話したところで頭の方を心配されるだけだろう。

なら、今は自分の感覚を信じて進むしかない。
僕の勘違いなら、それで済むのだけれど……。

森の中を進む。

途中から、ラジュアは聞いても無駄だと悟ったのか、無言のまま後ろを追従していた。
この先に何が待つのか。

二人は無言のまま、獣道をひた走る。

そして、走り始めてから十分程度が経った頃。

突然、目の前の光景が広がった。

どうやら、自然に生まれた広場のような場所らしい。

「……」

「……」

二人の足が止まる。

十分もの間走ったとはいえ、アークスとなるべく鍛錬を重ねてきた二人にとっては
それほど辛いものではない。

では、何故足が止まったのか。

——その広場の中央に、誰かがいた。

「…なあ、アラン。あそこにいるのが、お前の探してた“何か”か？」

「…分からない。でも、頭に響いてた声が此処で消えたんだ」

「…そうか。どつちにしろ、目の前で倒れてる人がいたら助けるのがアークスだ。すぐにあの子を助け——!!」

『ギチ…ギチ…』

「ダーカー!?!こんなところで…!」

「ちっ、悩んでる暇はなさそうだぜ、来るぞ!」

「ラジュアはあの子を頼む!優先はあの子の安全だ!!」

「気をつけろよ、アラン!」

後方から現れたダーカーに対し、すぐさま迎撃の構えを取り、突撃するアラン。

その後ろにはアランとの打ち合わせ通り、広場中央に倒れる少女の傍らでランチャーを構えるラジュアの姿。

しかし、ラジュアは引き金を引く事は終ぞなかった。

「すげえ…」

「……」

『トルネードダンス』からの『ケイオスライザー』。

先程までの戦いと同じような戦い方のように思えて、まるで違う——苛烈ともとれる動き。

また、先の戦いでは『キャンセル』という、強引な身体運びを用いた戦い方で敵を殲滅しており、今回も同じ動き方であったのだが——そこに、無駄はなかった。

『トルネードダンス』で敵に突撃。

これは先程と同じだ。

しかし、ここからが違った。

敵を縦断するように切り裂き、最後尾まで到達すると武器を真上へと放り投げつつ大地に手をつき、身体を跳ね起こす。

そして、真上へ放り投げた武器を掴むと、そのまま『ケイオスライザー』を使い、攻撃を受けて怯んだ状態の敵を吸い寄せせる。

最後は一固まりとなった集団に対し『サプライズダーク』で止めを刺す。

一連の攻撃を流れるように放つその姿はまさに、戦場を知るベテランそのもの。

「だ、大丈夫かアラン？」

「…う、うん」

どこか、茫然としたままダーカーが消え去った後の地面を見つめるアランを心配し、近くに寄ったラジュアだったが、怪我が無さそうだったのでホッと肩の力を抜いた。

しかし、此処が戦場である事を思い出し、すぐに武器を構えたまま再び声を掛ける。

「当面の危機は去ったし、あの子の様子を見がてら休息しようぜ」

「…そうだね。少し疲れちゃったよ」

ラジュアを見つめるアランの顔には今まで以上の疲労の色。

そもそも、あの戦い方はアラン本来の戦い方ではない。

威力が高い分、身体への負担も大きいに違いない。

『全アークスに通達。ダーカーによる空間許容限界の低下を確認しました。コードDの

発令を解除。警戒レベルを引き下げます。各員、安全を確認後、帰還してください』

「…どうやら、危険も去ったみたいだね。…この子に関しては僕たちじゃ判断できない

し、一先ず連れて帰ってメディカルセンターで見ても貰おうか」

「そうだな…。とりあえず、何とかなつた訳か…」

「まさか試験がこんな事になるなんてね…。ともかく、今は生き残れた事を喜ぼう」

「ああ。…けど、他の奴らは大丈夫だろうか…」

「…無事だといんだけど」

少年たちは危機を乗り切り、一つ高みへと至った。

現実を知り、育む絆は強くなった。

しかし、得られたものは確かなものだけではなく。

安全とされた惑星に現れたダーカーに、助けを呼ぶ謎の少女。

彼らに待ち受ける謎は未だ、解かれず。

∞
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
∞

第4話 a calamity Naberrius

見つけるは謎の軌跡。

求めるは謎の影。

油断するな。

探し求める者が追跡者とは限らない。

背中を見せれば喰われるのみ。

— a calamity Naberrius —

惑星ナベリウスに突如出現したダーカーが撃退されてから数時間後。

無事、生き延びる事に成功した少年アランと相方ラジュアはキャンプシップを降り、アークスシップへと戻っていた。

「それじゃ、俺は知り合いを探しに行くわ。また任務とかで一緒になったらよろしくな

！」

「うん。今回はお疲れ様！」

「おう！またな！」

無事にアークスシップの内部——二か所の内の一つ、ゲートエリアへと戻ってきた二人だったが、お互いの知り合いの安否を確かめるべく、違う場所へと歩き始めた。

ラジュアは今回の受験生が多く集まっていると思われる受験生控室へ。

アランは始まる前に皆と約束しておいた自分の居住空間——通称・マイルームへと跳ぶ。

自分のマイルームへと戻ってきたアランの目の前には怪我のない状態で談笑する三人の姿があった。

「みんな、無事だったんだね！」

「アラン！お前も無事だったんだな！！良かったぜ！」

「い、痛い！痛いつてばアフィン！」

声を掛けると真つ先に動いたのはアフィン。

アランに近寄ると頭をぐりぐりと叩く。

アラン自身も、痛いとは言いながらも嬉しそうに反撃していた。

そこへ、呆れた様子を見せるリユランと苦笑いを浮かべたりオンも近づく。

「落ち着け、アフィン。アランが痛がってるぞ」

「それに、今来たってことはまだ休んでないのでしょう？一先ず座ったら？」

「わ、悪い、アラン。お前も無事だったって分かったから、つい…」

「大丈夫だよ、アフィン。少し疲れただけだったから」

とは言うものの、連戦したのは事実。

息を吐きつつ、喉を潤すために用意されていた水を一口飲む。

「あ、それタバスコ」

「ブーッ!？」

「汚いぞ、アラン」

リオンの遅すぎる指摘に、アランは口に含んだ液体を吹き出す。

タバスコを直接口に付近だとなれば相応の激痛が走るのだから、アランの対応は可笑しくない。

リュランの冷静なツッコミも、致したが無いといえればそれまでなのだが…。

因みに、これが誰の悪戯であることは明白である。

「……」

「い、いや、俺じゃないぜ!?!俺は何もやっちゃいないぜ!?!信じてくれよ、アラン!」

必死に弁解を図る彼——アフィンには決死の覚悟が見て取れる。

だがしかし、残念かな。

彼には前科がある——それも、とびつきり大きいものが。

「養成学校時代」

「(びくつ)」

「窓際」

「(びくびくつ)」

「何か、言う事は…?」

「すみませんでしたーっ」

余程トラウマだったのだろうか。

温厚なアランが黒い笑みを浮かべていた。

あまり関わりたくないのか、近くに居たりユランやリオンも少しばかり距離を取っていた。

「それぐらいにしておけ。今は情報共有が優先だ」

「アフィンも少しは懲りたらいいのに」

「それはともかく、情報共有って?」

「今回の件…惑星ナベリウスにダーカーが出現した事について、だ」
「っ」

リユランの言葉に、アランが息をのんだ。

それは間違いなく、自分も欲する情報だからだ。

しかし、と彼は感じた。

「情報共有と言つても、『安全と言われる惑星でダーカーが出現した』以外に何か情報なんてあるの？ ほとんどの試験生は生き残る事で精一杯だっただろうし…」

「間違いなくあると思うわ。一先ず、私とリユランが持つてる情報から言いましょうか」
「一つ目。原生獣に奇妙な物体が突き刺さっていた。体感的にこの奇妙な物体が有る無いで性格的にも、体力的にも、攻撃的にも違いが見受けられた」

「それって丸い球体と受け皿みたいな形だった？」

アランの言葉に、やはり、とその目を見つめたのはリユラン。

しかし、否定するように首を横に振った。

「いや、俺が見たのは大きな目玉と嘴を模った物だった」

「そして、私が見たのは丸い球体から二本の鋭そうな何かが突き出てる物だったわ」

バラバラの場所で別々の人物が見かけたという謎の物体。

すり合わせた事で、一つの臃げな答えが見えてきた。

「…同じような効力があつたつてことは、形の違う同じものの可能性、かな。そして、効果は装着した対象の能力を上昇させ、攻撃的にする…」

答え合わせをするかのように己の考えを口にし、チラツと目の前のリュランの顔を窺う。

すると、自分を見ている事に気がついたリュランは、アランの言葉を肯定するように首を縦に振った。

横を見れば、リオンも同じように首を楯に振っていた。

「俺とリオンも同じ見解だ」

「アランも見たとなれば、他の試験生も少なからず見てたでしょうね。なら、この件はもういいわね。——むしろ、本題はこっちなんだけど」

「?他にも何か?」

「ああ。——アランは試験中、黒い仮面を被った人物を見てないか?」

「いや、見てないけど…その人がどうかしたの?」

「……」

「……」

アランが見ていないと否定すると、どう説明するべきか悩む様子の二人の姿。

そこへ、先に話を聞いていたのであろうアフィンが悩む二人を助太刀する形で口を挟む。

「どうやら、この二人はその黒い仮面を被った奴に襲われたらしいぜ」

「ええ!? だ、大丈夫だったの? 仮面を被ってたとはいえ、その人アークスなんでしょ? すぐに抗議しなきゃ!」

「……」

「……」

しかし、未だに二人は口を閉じたまま。

焦れた様子で先を促そうとしたアランだったが、ここで一つの可能性について思い当たる。

さすがにそれはないだろうと思いつつも、確認するべく口を開く。

「…何か、あったの? それも、二人が口にしないような事だよね……。つまり、その人はアークスじゃなかったんだ?」

「…ええ。データベースにヒットしなかったの」

「そして、〃何か〃を探す素振りを見せていた。その何かは分からなかったが——」
ここで、リユランは一度口を閉じた。

まるで、此処から先は語りたくはないと示すかのように。

それでも、アランはこの言葉を口にする。

友が悩んでいる。

話を聞いたところで全てを知る事は出来ないかもしれない。

それでも、想いを共有し、手を取り合う事が自分たちには出来るのだと。

「教えて欲しい。一体、何があったの？」

「…リオンを見た瞬間、奴は敵意を剥き出しにして武器を構えた。まるで、親の敵であるかのように、な」

「初対面な筈なんだけど…。あんな仮面を被ってたら忘れないだろうし」

リオンの顔をチラッと見つめ、アイコンタクトで承諾を得たのか、難しい顔をしたまま、リユランは話を続けた。

さらに、リオンからは謎の発言。

依然として意味が分からない事が多く、謎ばかりだ。

「…色々思う事はあるけど、今二人に怪我が無いってことは無事に乗り切れたってことだよな？」

「結論を急ぐな。まあ、その通りなんだが…」

「あと少しで襲われると思った時に、全く知らない人が現れたの。まあ、その後の会話で意図して助けた訳じゃないって知ってたけどね」

意図してないのであれば、何故助ける事が出来たのだろうか。

アランとアフィンは同じ疑問を思い浮かべたが、口に出す事は無い。

今、この場は重要な局面に差し掛かったのだと理解しているからだ。

「助けてくれたのはゲッテムハルトって男とシーナって女の子の二人組。襲いかかってきた人物がアークスじゃないって事もそのシーナって女の子が調べてたのを耳にしたからよ」

「で、そのゲッテムハルトって男と襲撃者の力量は互角……。小手調べだったとは思いますが、それでも熟練者だろうとは感じた」

「…それで？そのあとはどうなったんだ？少なくとも、戦闘はあった訳だし、そこでお終いつてわけじゃないだろ？」

アフィンの問いに、首を横に振って否定するリユラン。

「いや…アークスじゃないって事が分かった瞬間、すぐさま間合いを取って去ってったよ」

「結局、何故襲われたのかについては謎のままよ」

うーむ、と腕を組んで考え始めたアランであったが、何も思いつかず。仕方無い、と気持ちを切り替えて自分の持つ情報について話し始める。

先程、相方のラジュアと見つけた謎の少女について。

「———そうか。そちらもそちらで大変だったみたいだな」

「それにしても、その少女は何故そんなところで倒れていたのかしら？試験生なら目印であるナンバーカードを持ってきているだろうし、逃げてる途中で落としたのだとしても、試験専用の配布された武器は離さず持つだろうし……」

「結局、アランの方も謎ばかりってわけか……。やれやれだぜ」

三者三様の答えを口にしたところで、急に場が静まりかえる。

特に何かあった訳ではない。

ただ、話すべき内容を話し切ったため、話題がなくなってしまっただけだ。

「——そうだ！とりあえず、何か食べに行かないか!?試験も何とか終わった訳だし、ここらでぱーっと騒ごうぜ！」

突然、試験終了の記念として打ち上げを提案したアフィンに三人それぞれ無言の視線を送った後、特にすることもない以上、提案に乗るべきだと判断して席を立つ。

それに、無言の視線を送ってはいるが、三人ともアフィンには感謝している。

先程のような状況で堂々と発言しようとする人物はそうそう多くは無い。

だが、アフィンはそんな場だからこそ、盛り上げるべく自分から動き出す。

そんな心遣いに、何度救われたことか。

「じゃあ、今日はアフィンの奢りだね」

「えっ!?!」

「食堂で一番高い品物頼んであげるから楽しみにしててね」
「ちよ!?!」

「安心しろ、骨ぐらいは拾ってやる」

「安心できるかーっ!?!」

もちろん、これらの発言は冗談だと全員が理解している。

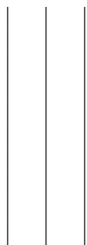
——若干一名、本気だったかもしれないが。

それでも、彼らは笑いあう事が出来る。

未来に待つのは困難や絶望かもしれない。

しかし、恐れる事は無い。

自分たちには信頼すべき友が側にいるのだから、と。



ばしゃ、と水溜りが跳ねる。

豪雨の降り注ぐナベリウスのとある場所に、奴はいた。

『——見つけたぞ、憎き敵』

豪雨によって視界が悪いにも関わらず、奴は何も気にすることなく歩き続ける。
行く当てはあるのか。

ただ、ひたすらに前へと歩き続ける。

『——奴を殺す』

闇に紛れる。

それ以降、奴の行方は分からない。

奴が何者かも——分からない。

∞ t o b e c o n t i n u e ∞

第5話 the ice world

密林から続くは閉ざされた世界。

俗世を拒む永久の大地。

恐れよ、侵入者よ。

襲いかかる牙は何人たりとも逃しはしない。

— the ice world —

僕は今、再びナベリウスへ来ている。

恐怖から自棄になった：訳ではなく、地質学者であるロジオさんに調査の手伝いを依頼されたからだ。

目的地はナベリウスのエリアの一つである『凍土』だ。

これまでこなしてきたクエストのほとんどが今いる『森林』で終わっていたため、凍

土へ足を踏み入れた事はない。

どんな世界を見る事が出来るのか、楽しみだ。

今回のクエストの相手は親友のリオン。

本当は、リユランやアフィンとも一緒に来たかったのだが、アフィンはいつも通り人探しに出ていて、リユランは師匠に呼び出されたらしい。

残念だけど、仕方が無い。

というわけで、キャンプシップから飛び降り、森林エリアへと降り立った。

今までと変わらない長閑な緑林が生い茂っている。

しかし、今回の目的地は此処じゃない。

『アランさん、聞こえますか?』

「こちらアラン。ロジオさん、聞こえるよ」

『その先に凍土へと続く道があります。まずはそこを目指してください。データに関してはこちらでモニタリングしてしますので、気にしないでください』

「了解です。行こう、リオン」

「ええ。行きましょう」

リオンへと声をかけ、先へと進む。

隊列は前衛が僕、後衛がリオンだ。

この配置の主な理由は、リオンが魔法を扱うクラス『フォース』だからだ。

フォースは体内・体外のフォトンを利用して大火力の魔法を扱える反面、打たれ弱い。よつて、近接職である僕が前に出るのは必然。

——まあ、この近辺程度なら僕の出番はないかもしれないけど。

以前見かけたリオンの実力を思い出し、僕は内心で苦笑いを浮かべた。

そんな事はさておき、原生獣が潜んでいないか付近を注意しながら進む事、十数分。僕たちの目の前には大きな洞窟が姿を見せた。

『この先が凍土へと通じています。アランさん、リオンさん。お気をつけて』

「ありがとうございます」

「森林から凍土…：意味分かんないよ…」

「え?」

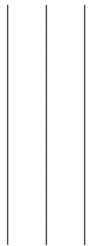
「あ、ううん。気にしないで。行く行く」

「う、うん」

リオンが呟いた言葉は気になるけど、本人が気にするなど言っている以上、聞く訳にもいれない。

リオンは他の人が知らないようなことまで知ってるから、今回も僕の想像つかない何かがあるんだろう。

…やっぱり、知りたいなあ。



洞窟を抜けた先は一面、白銀の世界だった。

綺麗なんだけど……寒い。

「気温は…マイナス二度か。プロテクターを着てる筈なんだけど、それでもまだ寒いね」

「……」

「…？リオン？」

「…はあ。寒いのはご尤もなんだけど…納得いかないわ」

「えつと…何に？」

『アランさん、リオンさん。目的地はさらにその奥です。この先は道が険しく、現れる敵も変化しているので注意してください』

「分かりました。——リオン、さっきの話の意味って…?」

「…さっさと行きましょ。こんな寒い所に長時間居たくないわ」

「わ、ちよつと待つてよ!」

結局、呟いた言葉について聞く事は出来なかった。

まあ、今はクエスト中だし帰還したらまとめて教えてくれるよね、きつと。

まずは目の前のクエストに集中しよう。

ロジオさんの話では敵の種類も違うみたいだし、気をつけないと…。

「——来たね」

「ガルフに似てるけど…全体的に白っぽいわね」

『リオンさん、その通りです。そいつは凍土に順応したガルフ種——名をガルフルと言

います』

ガルフル…ガルフと動きが同じなら、跳びかかりに注意すれば良い筈。

しかし、他に変化点が無いか見る必要があるね。

「まずは動きを見たいんだけど…良いかな?」

「リーダーはアランよ。私はそれに従うわ」

「ありがとう。一先ず、リオンは回避に集中して。少しの間、ガルフとの違いを見るか

ら」

「了解」

新しい敵と遭遇したら、まずは動きを見極める。

試験で学んだ、生き残るための戦い方だ。

死んだら全てが終わってしまうこの世界だからこそ、こういった情報が重要だ。

——まあ、アークス用の図書を調べれば載ってそうだけどね。

得物を構える。

どうやら、ガルフルは一匹のようだ。

ガルフ種は群れで動き回るのだけど……どこかに居るのかもしれない。

しかし、動きを見極めるのだから一匹なのは好都合だ。

「……」

『ぐるぐる』

こちらを窺うようにゆっくりと近寄るガルフル。

しかし、こちらが攻めてこないと感じたのか、少しだけ身体を後ろへと引いた。

『ガウツ』

ガルフと同じ、跳びかかりだ。

予想通りの動き、距離。

受け止める必要もないから、後ろへとステップする。

攻撃が失敗したと見るや否、すぐさま跳びかかった勢いそのままに後ろ足で立ち上がった。

全体重を乗せたのしかかり。

これも、ガルフ種と同じ動きだ。

それから数分程度様子を見たけど、これ以上の動きをする事は無かった。

どうやら、ガルフルはガルフと同じ動きしかしないらしい。

これ以上は時間の無駄だろうと思い、力一杯切り裂く。

当たり所が良かったのか、一撃でガルフルは倒れた。

少しばかり動き回っていたせいか、身体が火照ってしまった。

休憩も兼ねて、今の戦闘で分かった事をおさらいしようかな。

「お疲れ様。ガルフルはどうだった？」

「ガルフと全く同じ動きだったね。多分、気候に適した外見に変わったただけなんだよね」

「みたいね。詳しい情報は既に調べておいたから休憩の間に見ておいてね」

「流石だね、リオン。もう調べ終わってるんだ」

「後衛だし、相手は一匹だったからね。後方から来ないか確認していれば後は何もする

ことがないもの」

「そのお陰でこうやって詳細が分かるんだから、僕は感謝感謝だよ」

リオンが調べてくれた情報を見ながら、僕は思う。

今後気をつけるべきなのは森林エリアに居なかつた種類の敵だろう。

森林エリアにはウーダン種が居たが、凍土エリアには何がいるのか…。

それこそ、奥に進まないと分からない。

「よしっ！先に進もう」

「——等と意気込む自分が居ましたよつと…」

「アラン、どうかしたの？」

「一時間前の自分を恨んでただけだよ…」

「…そう。程々にしておいてね」

リオンのフォローが辛い。

そう、一時間前に歩き出したはいいけど、全く敵が出てこない。

最初こそ、凍土エリアに入つてすぐ出現したから次も…と考えていたのだけど。

世の中そう上手くはいかないように。

『調査を依頼した身としては、あまり敵が出過ぎるのも困りものですが…。やはり、物足りないものですか？』

「そう、です。実地訓練でもあるので、戦闘はあるに越したことはありません」

「敵から獲れる素材は私たちの収入源でもあるので、やはり、多少なり戦闘は行いたいですね」

『なるほど…。分かりました。調査は多少なり遅れても構いませんし、アランさん達の都合に合わせて奥へ進んでください。欲しいデータがあれば、こちらからも支援しますよ』

「え…。でも、時間とかは大丈夫ですか？」

ロジオさんの申し出に、思わずリオンの顔を見てしまう。

リオンも驚いているようだが、表面上の変化は乏しい。

何だろう、何故か負けた気分。

『問題ありません。勿論、検証などに時間はかかりますが、元々時間がかかるものですから、ある程度の遅れは気にもなりませんし』

「分かりました。お言葉に甘えて、少しの間この近辺を探ります。それでいいかな、リオン？」

「良いと思うわ。まだ、凍土エリアの敵とほとんど戦えていない訳だしね」

リオンからも肯定を得たので、さっそく近くの脇道から付近の搜索へと移る。

さて、敵が出てきてくれればいいんだけど――

「……」

「……」

「……」

「……」

「……え？何この状況」

「——『ラ・フォイエ』！」

脇道へと進んだ僕たちを待っていたのは、ギラギラとした目でこちらを見つめるガルフルの群れ……総勢、十匹。

まさかの展開に頭が追いつかず、呆けたままの僕を置いて、リオンはすぐさま先制攻撃を放つ。

炎系テクニック『ラ・フォイエ』だ。

『ぎゃお!』

群れのほぼド真ん中で起爆したようで、爆発した周囲へとガルフル達が吹き飛ぶ。

つまり、僕たちの目の前へと飛んでくるものもある訳で…。

慌てて僕はダブルセイバーを構え、斬撃を放つ！

「はあッ」

『ギッ』

構えるのが遅かったためか、息の根を止める事はできなかった。

しかし、胴体を深く切り裂いたので致命傷だろう。

すぐに次の敵へと視点を切り替えるが…遅かった。

「アラン、遅いわよ」

「リオンが早過ぎるだけだよ」

死屍累々の中央で、ロッドを構えたままこちらを見るリオンは流石の一言。

僕が一匹に対応している間に残りの九匹を倒してしまふのだからね。

養成学校で密かに『死の女王』デス・クイーンと崇められた実力は伊達じゃない。

「アラン…このまま凍らせてあげようか？」

「ごめんなさい、勘弁してください」

どうやら口にしていたようで、リオンの周囲から冷気が漏れ出していた。

すぐさま僕は土下座する。

——プライド？

そんなもの、そこらのガルフにでも食わせちゃえ。

「貴方だって、『両剣使い』セイバーマスターとか呼ばれてたでしょうに」

「それだけは止めて!!」

何て恐ろしいトラウマを思い出させてくれるんだ、リオン！

あんな…あんな事は二度と御免だ…ツ!!

『えつと…大丈夫ですか、お二方?』

「…今は、そつとしておいてください」

そういえば、ロジオさんも聞けたんだつた…。

まさか、僕のトラウマを知る人物が増えてしまうだなんて。

…いや、ロジオさんは善人だ。

頼めばちゃんと分かってくれるだろう。

——うん、多分、きつとそうだ、うん。

「ほら、いつまでもいじけてないで進むよ」

「おー…」

『(本当に、大丈夫なんでしょうか…?)』

先程までとは打って変わって、不安で不安で心配になってしまいうロジオなのでした。

∞ t o b e c o n t i n u e ∞

第6話 the frozen origin

見つけよ、隠されし宝を。

死守せよ、その栄光を。

意味を問わず己に従え。

この世に無意味はあり得ぬのだから。

— the frozen origin —

ガルフルの群れに遭遇してから数十分。

どうやら、あの脇道は原生獣の住処が密集していたらしく、次々に襲われることとなった。

しかし、僕とリオンからすれば、数が多いだけでしかなく、怪我する事無く戦闘を終えたのだった。

「これだけ遭遇戦があると遣り甲斐があるね」

「素材もかなり集まったし、十分な収穫ね。後はロジオさんの調査を終わらせるだけ」
「うん。ロジオさん、このまま奥に進めば？」

『はい。この先に奥へと続く道があります。分かれ道を右へ進んでいただければと思います』

「分かりました。——!!」

「…どうやら、招かねざる客のようね」

ロジオさんと連絡を行っていると、突然前方から奴らの独特な気配に気がつく。

リオンも察したようなので、間違いない。

僕たちが居る場所から数十メートル前方。

その何もない空間が捻れる。

そして、中から二体のダーカー…ブリアーダが姿を現した。

すぐに武器を構える。

ブリアーダは動きが鈍い代わりに毒を吐いたり、ダガンを生み出したりするため、要注意対象となっている。

しかし、僕たちはすぐに困惑してしまう。

それは、ブリアーダの行動にあった。

『今のデータは…ダーカー、ですか？しかし、ダーカーはアークスを見つければ必ず襲いかかってくる」と資料にはあるのですが…』

「そう、ですね…。一度、こちら見ているので気が付いていないという事はないですし」

ロジオさんとリオンの会話を聞きながら、僕はとある噂を思い出す。

ロビーで囁かれてた、根も葉もないいい加減なものだと言われていた噂だ。

「もしかして、例の噂は本当なのかな？」

『『ダーカー達が何かを探してる』って言う、あの噂？』

どうやら、リオンも知っていたらしい。

首を縦に振って肯定する。

「うん。眉唾ものだって言われてたけど…もしそれが本当なら？」

「そうね。それが本当なら今のブリアーダの動きも信憑性が増すけれど…。でも、それが本当なら奴らは何を探しているのかしら？敵であるアークスの存在を放置してまで優先するだなんて…」

『…なんだか不気味です。何度も言ってしまったって申し訳ないですが、十分注意して進んでください』

「はい。ありがとうございます」

心配してくれるロジオさんにお礼を言い、ブリアーダが去って行った方向…西へ進

む。

深い谷や狭い通路に気をつけながら道を進むと、凍土エリアではほとんど見かけなかった姿に気がつく。

ダガンや頑丈な甲羅を持つミクダ、これまた頑丈な全身を持つカルターゴ、またまた頑丈な盾を持つガウオンダ……。

赤いコアを狙えば簡単に倒せるが、それはさせないとばかりに動く奴らに手こずったのは思い出だ。

まあ、今も簡単に倒せるとは言わないけど。

「コア以外にはほとんどダメージが入らない相手は時間がかかるね」

「近接職は近づく必要があるから仕方無いわ。私は遠距離から狙える分、そこまで苦勞はしないのだけど」

そう言って、リオンは近づいてきたガウオンダを狙って『ラ・ザン』を放つ。

ガウオンダを中心に竜巻が発生し、連続ダメージを与えているのが分かる。

「まあ、フォースが別格というより、リオンだけが別格なんだよね。テクニク連続してもほとんどフォトン切れしたことないでしょ？」

「ちゃんと自分の撃てる数を把握して攻撃するからよ。何も考えずに撃ち続ければいつてわけじゃないの」

「…そうなの？」

その割に、ほぼ連続でテクニックを撃ってる気がするけど。

道中の敵もリオンが先制して弱ったところを僕が止めを刺すって感じだし。

敵の数がまばらとはいえ、結構いたと思うんだけど…。

「アランは好きなように戦えばいいと思うわ」

「…なんだろう、バカにされてる気が…？」

いや、でも学園時代でも好きに戦えってよく言われたし…。

もしかして、僕はアホな子って思われてないだろうか…？

「気のせいよ。ただ、貴方は考えて戦うより感性で戦った方が強いだけ」

「思考を読まないでください」

「声を出してしゃべってるわよ」

「……」

それはマズイ。

意識的に口に出さないようにしないと。

「……」

「……」

突然、リオンが立ち止まって近くの氷柱に隠れた。

何が、と聞く前に襟を掴まれて近くに引つ張られた。

何とかこける前に体勢を立て直し、無言のままリオンに訴える。

すると、リオンが前方を指差した。

その先を見て、僕も何があつたのか理解した。

黒づくめの人物がいた。

「どうやら、全身だけでなく顔までもプロテクターで隠しているようで、どんな人物か全く分からない。」

あれが、リユランやリオンの言っていた黒い仮面の人物か…。

そいつは周辺を見渡した後、奥へと進んでいった。

「アレが、リオン達が言っていた黒い仮面の人物…で、合ってる?」

「合ってるわ。相変わらず、不気味ね…」

『…もしかして、もう一つの噂にあつた凍土で見た人影、というのはあの人の事なのでは?』

「かもしれないね。此処から先、さらに注意して——リオン?」

突然、リオンが周囲を見渡し始めた。

何かあつたのかな？

「…ねえ、今音が聞こえなかった？こう、キーンっていう…」

キーンっていう音…？

耳を澄ましてみるけど、特に何も聞こえない。

「いや、僕は何も…ロジオさんはどうですか？」

『…すみません、こちらのデータでも捕捉していません』

「そう…。気のせいだったのかしら…？」

「分からないけど、もしかしたら何かあの仮面の人と何か関係があるのかもしれない。

例えば、在った事がある人にしか聞こえない、とか…」

「…それは嫌な音ね」

それは自分も思った。

とにかく、奥に進めば分かる事だろう。

慎重に奥へと進む。

出てくる敵の数も減り、そろそろ最奥地かと思つた矢先に、それは起きた。

「――」

「リオン、大丈夫？」

「え、ええ。またあの音が聞こえただけ」

「もう五回目だね。しかも、感覚が短くなってきたし……この先に何かあるのかな」

「かもしれないし、そうじゃないかもしれない。行かなくちゃ分からないわ」

「そうだね。——って、アレ？」

リオンと話しながら進むと、もうすぐ奥地という道の真ん中に青白い光を放つ何かが目撃されていた。

半透明で、中央に何かあるようにも見えるけど……良く分からない。

『うーん、何でしょうか、これ？……人工物、でしょうか？』

「水晶にも見えるけど……触れるのかしら？」

リオンが手を伸ばす。

すると、謎の物質が光を放ち、消えてしまった。

残されたのは謎の物質に手を伸ばそうとしたリオンと、その手に収まった謎の物。

『……パラメータ的には武器でしょうか？それにしても形状がおかしい……。壊れているのでしょうか？』

「なら、武器屋か鍛冶屋に見せてみよう。誰か分かるかもしれない」

「そうですね。ロジオさん、調査はこの辺りでも大丈夫ですか？」

『ええ。問題ありません。機器を転送しますので、順次始めて——』

『それを離せ……』

後ろから聞こえてきた無機質な声と漂う濃厚な殺気に、思わず前方へとダイブする。前転しつつ体勢を立て直し、武器を構える。

先程まで僕達がいた場所に、そいつは居た。

「か、仮面の人…」

「…唐突ね、危なかつたわ」

地面が軽くへこんでいる。

つまり、それだけ強く叩き下ろしたという訳だ。

大剣とはいえ、ただ振り下ろすだけではあり得ない地面を見て、目の前の人がどれだけ本気なのかを窺えた。

『…避けたか』

「お前は一体…何者なんだ!!」

『……』

僕の問いには答えず、大剣を構え、振り下ろしてきた！

僕じゃ耐えられないかもしれないけど、少しぐらいは時間を稼がないと！

「ぐっ…」

『……』

ダブルセイバーは一撃の威力よりも手数で攻めるタイプの武器だ。

その構成上、防御する際も受け止めるのではなく、いなす形を取っている。

よって、大剣のような力押し of 攻撃を受け止めるような設計はされておらず――

――ピシッ

「やばっ!」

慌てて武器を弾いて下がるものの、今の攻防から考えてもこちら側が圧倒的に不利だ。

武器の中央部分に罅が入ったため、理想とする攻防をすることが難しい。

「はあっ」

リオンが反撃とばかりに『イル・グランツ』を放つものの、仮面の人は後方に下がりとつ武器を振りまわす事でその光弾を打ち消して見せた。

…間違いなく、強敵だ。

「…どうする、リオン」

「…アランの武器が危険な以上、出来れば広い場所で戦いたいわ。」

『でしたら、この先に広場のような場所があります。このまま道なりに進めば辿り着きます!』

「ありがとうロジオさん!」

すぐさま奥へと走り出す。

少なくとも、広い場所に出れば同時に攻撃される危険性は低くなる。そして、フォースの弱点である打撃攻撃も距離を稼げれば問題無い。

その場所まで何とか耐えないと……っ。

「はっ！」

『……』

簡単に距離を詰められないよう、時折リオンが後方に向かって『イル・グランツ』を放っているのが見える。

誘導性が高い事を理解しているのか、仮面の人は避けるのではなく武器で弾いて無力化しているが、それこそリオンの狙いだろう。

大剣は構えているとその重量故に動きが鈍くなる。

つまり、防御している間は、こちらが一方的に逃げる事が出来る。

これで何とか広場まで……見えた！

「アラン、中央付近まで行くわ！」

「うん！」

しかし、あと少しで広場に出られる、という場所で悪寒が背中を走る。

とっさの判断で真横へとダイブする。

重みのある後が僕の居た場所へと突き刺さった。

『逃がさない』

「くっ…」

此処に来て、止められちゃうとはね。

仕方なしに壊れかけの得物を構える。

この得物がどこまで持つか…。

溜められた力をブーストに、仮面の人の大剣が振り下ろされ――

『危ねえ、アラン！』

横から飛び込んできた何者かの大剣に阻まれた。

「！ゼノ先輩!!」

「よう、アラン。無事だったか？」

「は、はいっ」

現れたのは『ハンター』のゼノ先輩。

そして、少し遅れてフォースのエコー先輩。

何でこんなところに居るのか分からないが、助かった…。

「奥へと入ってくお前らを見て思わず着いてきちまったが、こりやどういった状況だ？」

「えっと、話せば長くなるというか…」

思わずって…いや、そのお陰で助かった僕が言える言葉じゃないか。

「それよりも…その人、アークスなの？」

「データベースに載っていないので分かりません」

ゼノ先輩達が合流したのを見てリオンも武器を構えながら現れた。
これで三対一。

いくら仮面の人が強いとしても、大丈夫だろう。

「…おい、お前。どこのどいつだ、所属を言え」

『——邪魔をするなら、殺す』

「……はー、退く気はないっつか。なら、力づくでご退場願うぜ!!」

ゼノ先輩が大剣を振り下ろす。

それに合わせる形で仮面の人が大剣を振り上げる。

中央でぶつかった二つの剣は、弾かれる事無く拮抗する。

「忘れて貰っちゃ困るわ!」

「追撃…ッ」

リオン、エコー先輩のテクニックが仮面の人へと迫る。

それを察するや否や、剣を弾き、後方へと跳ぶ。

仮面の人がいいた場所に二種類のテクニックが炸裂し、地面と覆っていた雪が宙を舞う。

そんな偶然に出来た目隠しを利用してゼノ先輩が仮面の人へと攻めかかろうとして——逆に攻めてきた仮面の人の攻撃を受ける。

「ぐっ……中々やるじゃねえか……ッ」

「……」

「『シフタ』！」

「『フオイエ』!!」

思うように攻める事が出来ないゼノ先輩を見て、エコー先輩は炎系テクニック『シフタ』を、リオンはこれもまた炎系テクニック『フオイエ』で援護を行う。

『フオイエ』が攻撃系と分類するなら、『シフタ』は数少ない補助系のテクニックだ。

その効果は、自身からある一定の味方の力を上昇させること——

「おおおおおッ」

「……っ」

力が上がったゼノ先輩が仮面の人の剣を押しこむ。

そこへ迫るリオンの『フオイエ』に、仮面の人は剣を弾いた勢いのままバク転するこ
とで難を逃れる。

「えっ、何で光って——」

突然リオンが叫んだと振り返れば、先程手に入れた武器らしきものが光りだしていた

のだ。

それを狙っていたらしい仮面の人も、光景に気を取られた。

「隙ありッ」

『っ』

その隙を見逃すゼノ先輩ではなかった。

振り抜かれた一撃は、仮面の人の仮面を多少なり破壊する事に成功した。

——己の破損を引き換えに。

「おいおい、業物がイカれちまったぜ」

「でも、初めてあいつに攻撃がヒットしたよー」

エコー先輩が嬉しそうな声を出すのも無理はない。

この数分間、一度も攻撃を当てる事が出来なかったのだ。

さらに、三対一という状況を踏まえて考えれば、相手がどれだけの実力者なのか考えたくもない。

『——今は、退く』

状況の悪化と踏んだのか、仮面の人はそのまま大きく跳んでこの場を去って行った。

…追いかける事は出来ない。

僕は得物がほぼ壊れているし、ゼノ先輩の得物も戦闘を続けなければいずれ壊れるのは想

像するに難い。

後衛職の二人であの相手を押えきるのは困難だろう。

だからこそ、仮面の人が引いて戻ってこない事を確認した僕は大きく息を吐いた。

「…良かった」

「アラン、大丈夫？」

「僕は大丈夫。リオンこそ、怪我は無い？」

「私も問題ない。疲れたぐらいよ」

「なら良かった。——ゼノ先輩、エコー先輩。助けて頂き、ありがとうございました」

「良いって事よ。にしても、とんでもないヤツだったな。探索後だったんだろ？二人と

も、頑張ったな」

リオンはともかく、最後の戦闘で見てるだけだった僕としてはあまり褒められたもの

じゃないんだけどね…。

「それで、あの仮面野郎が狙ってたのは、リオンの持つてるそのガラクタか？」

「おそらくは、ですけど…」

不確かなのはそれだけじゃない。

リオンの聞いたという、謎の音についてもだ。

戦闘中も、何度か鳴っていたらしいけど、僕だけでなく、ゼノ先輩やエコー先輩、口

ジオさんも分からないと言っていた。

リオンにだけ聞こえる謎の音：一体、何が原因なんだろう。

「まあ、考える事はロビーでもできるしな。学者さんよ、そっちが求めるデータも十分集まっただろ？」

『はい。そちらも十分に採れています。アランさん、リオンさん。ありがとうございます』

その後、何故ゼノ先輩が僕達の依頼内容を知っているのかについて話題に上がったが、エコー先輩が調べていただけだとバラしたため、失笑を買っていたのは内緒である。ふう、ようやく長い半日が終わりそうだ。

∞ t o b e c o n t i n u e ∞